

# 令和6年 東京都輸血状況調査集計結果（概要）

## 1 調査対象・回答率

### （1）目的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

### （2）対象

都内にある病床数20床以上の医療機関：633箇所、令和6年1月～12月を調査対象期間とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、電子メールのいずれかとした。

※令和5年調査より、精神科・神経科・心療内科単科医療機関も対象とした。

### （3）結果

518機関（回答率81.8%）（前年：635機関中548機関 同86.3%）から回答が得られ、うち一般病床100床以上の機関は196機関（同91.2%）であった。

得られた回答は「令和6年輸血状況調査集計結果（概要）」としてまとめるとともに、100床以上の196機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

### （4）報告

「令和6年輸血状況調査集計結果（概要）」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100床以上の196機関については、「令和6年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」（個票）を作成し送付する。

## 2 集計結果の概要（項目別）

### （1）輸血療法委員会の設置状況

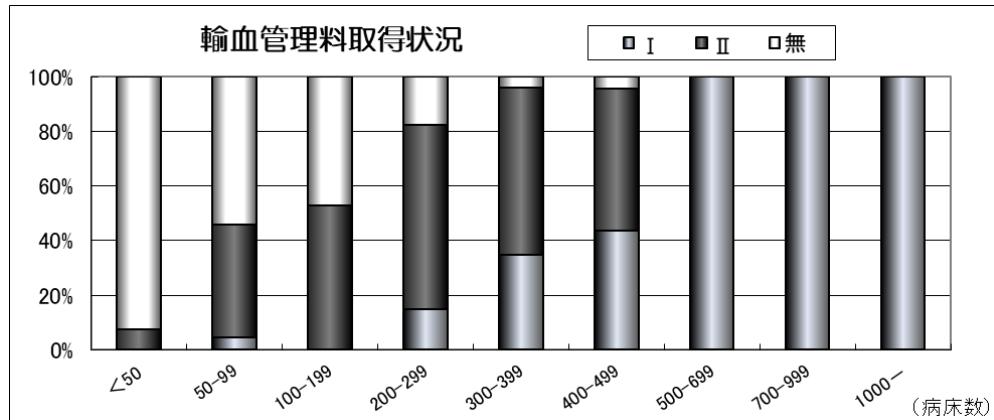
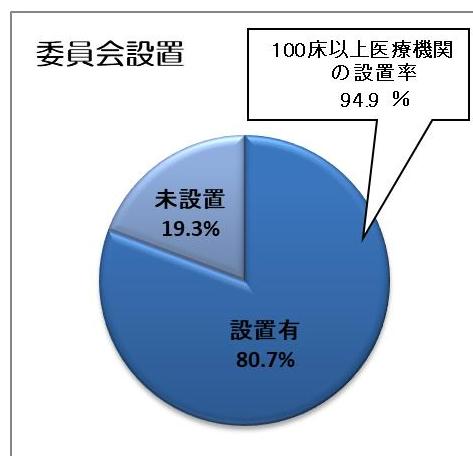
委員会を設置している医療機関は、418機関（80.7%）であった。

（前年429機関 78.3%）

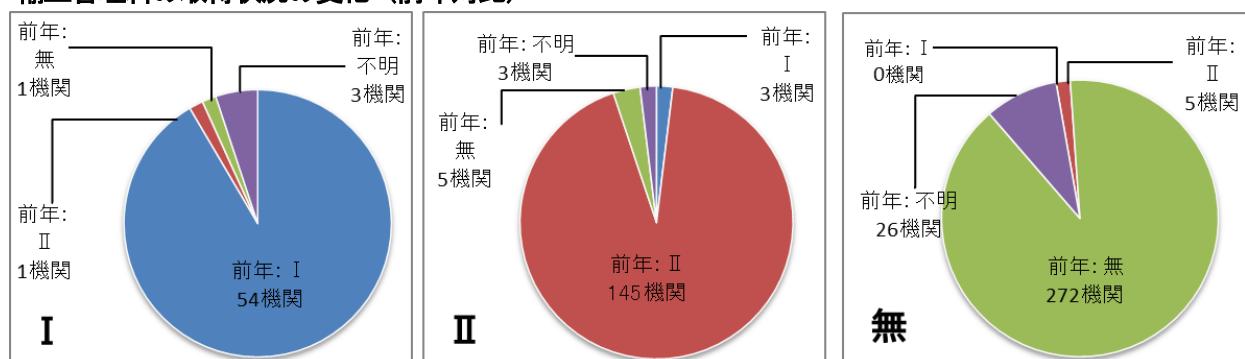
一般病床100床以上の196機関でみると、委員会設置は186機関（94.9%）であった。（前年193機関 96.0%）

### （2）輸血管理料（I・II）の取得状況

取得機関は215機関（41.5%）で、内訳はI：59機関、II：156機関であった。（前年219機関 40.0% I：62機関、II：157機関）



輸血管理料の取得状況の変化（前年対比）



### (3) 院内採血の状況

院内採血はなく、前年と同様である。

### (4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア 赤血球製剤の使用量は 654,551U で、前年 683,713U より減少した。

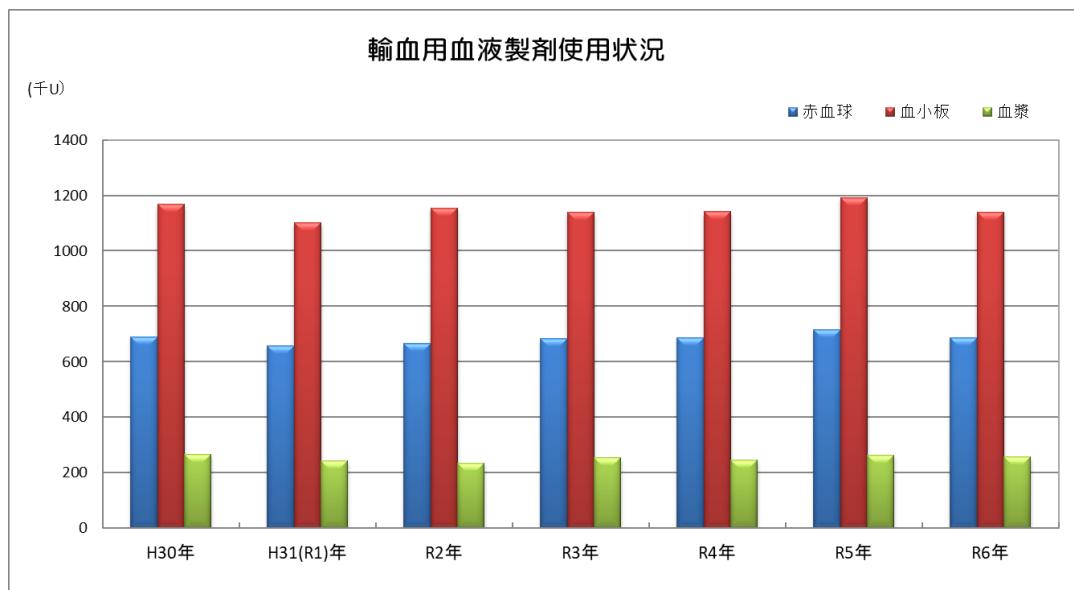
イ 血小板製剤の使用量は 1,140,401U で、前年 1,190,100U より減少した。

ウ 血漿製剤の使用量は 256,744U で、前年 261,683U とほぼ横ばいである。

エ 全血製剤（日赤製）の使用はなく、前年と同様である。

オ 白血球濃厚液の使用は 5 機関あり、使用対象は顆粒球輸血（5 人）、ドナーリンパ球輸注（21 人）であった。

カ 同種クリオプレシピテート作製本数は、新鮮凍結血漿（FFP）LR240 から 16 本（2 機関）、LR480 から 1,174 本（11 機関）であった。



### (5) GVHD 予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院 390 機関中の全てが照射血を使用しており、前年の 100% と同様である。

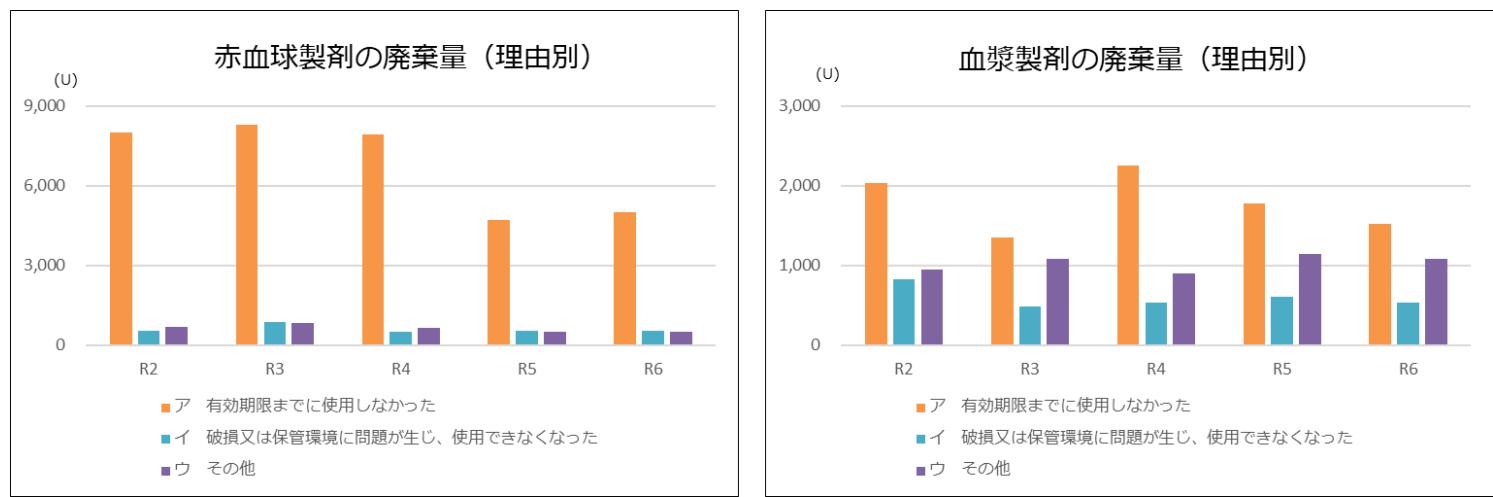
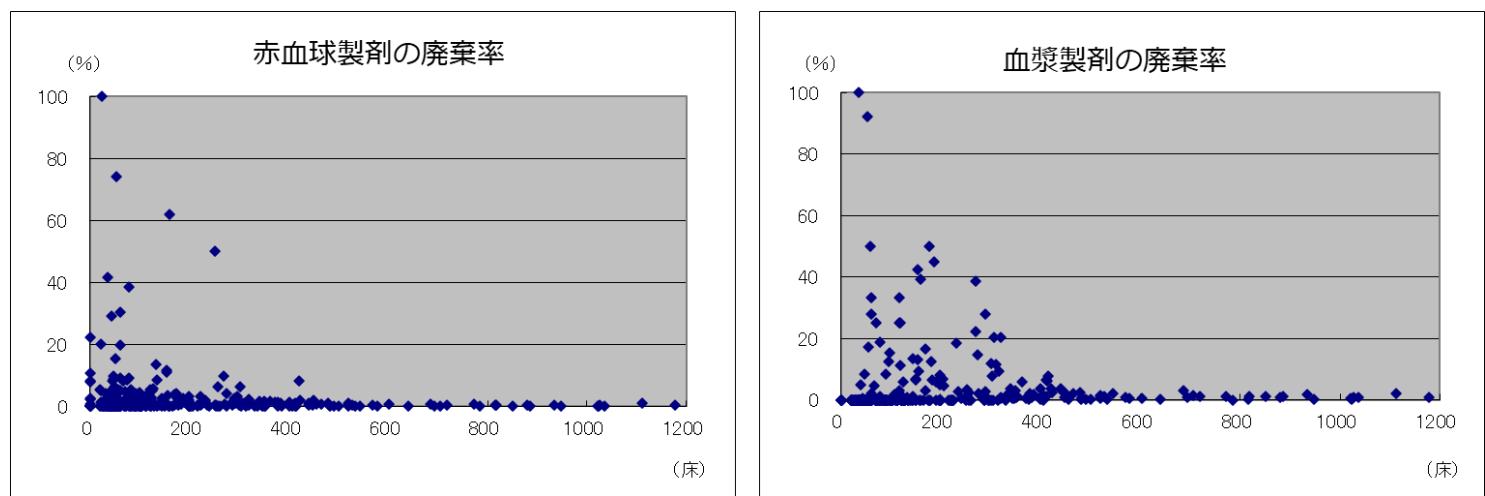
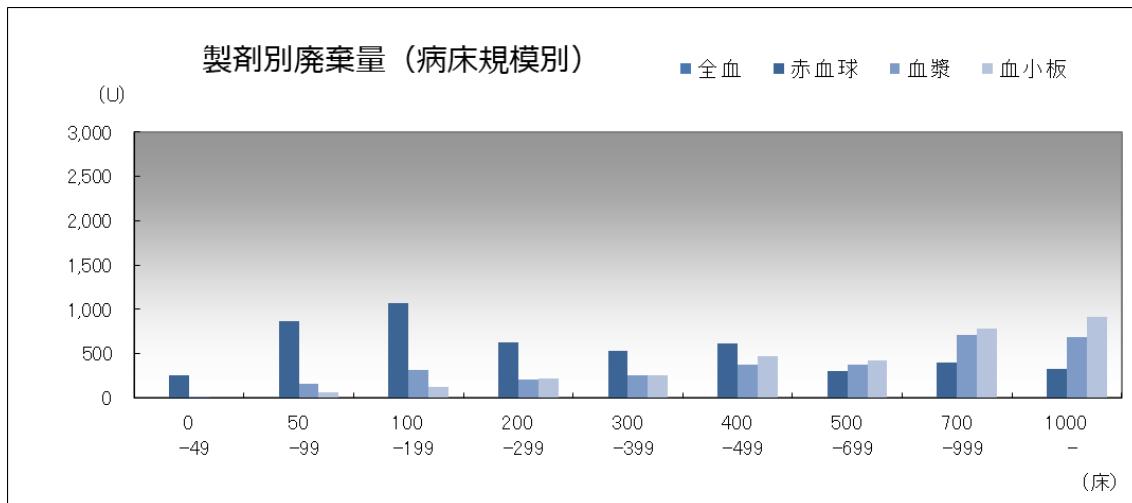
### (6) 製剤別購入・廃棄量の状況

ア 全血製剤は、前年と同様、購入・廃棄ともになかった。

イ 赤血球製剤の廃棄率は 0.8% (5,001U) で、前年 0.8% (5,734.5U) と横ばいである。

ウ 血小板製剤の廃棄率は 0.3% (3,262U) で、前年 0.3% (3,222U) と横ばいである。

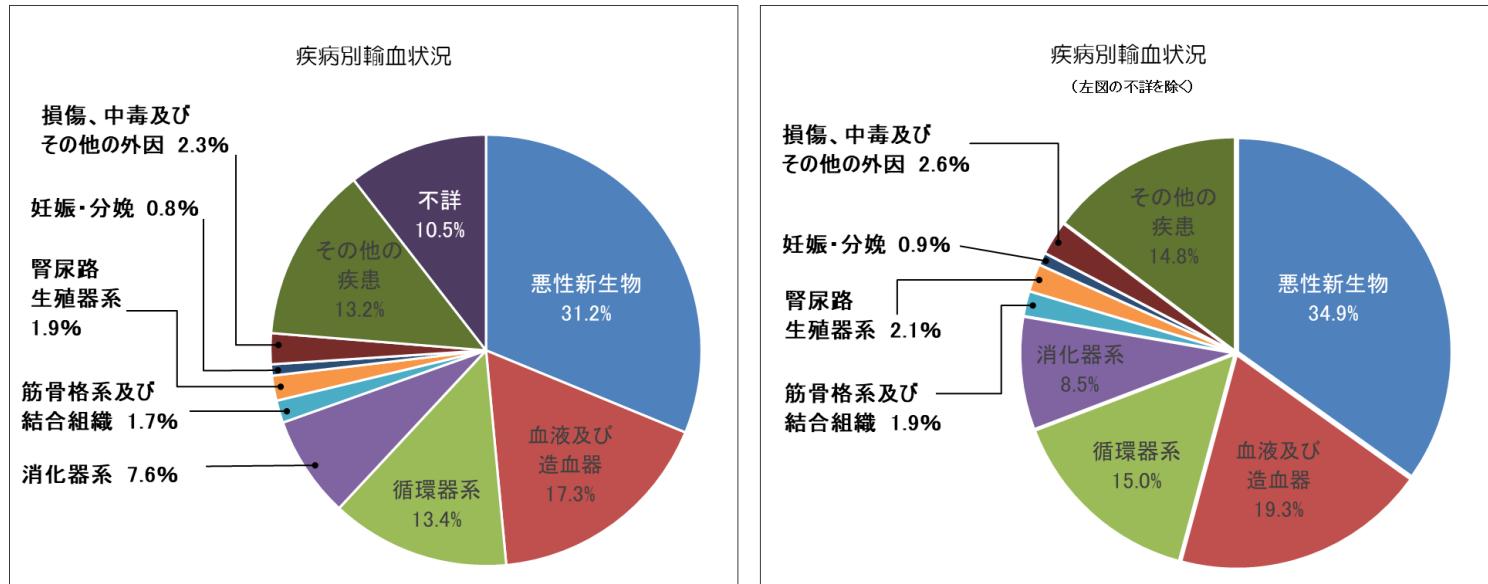
エ 血漿製剤の廃棄率は 1.2% (3,135U) で、前年 1.3% (3,529U) より減少した。



## (7) 疾病別及び年代別輸血状況

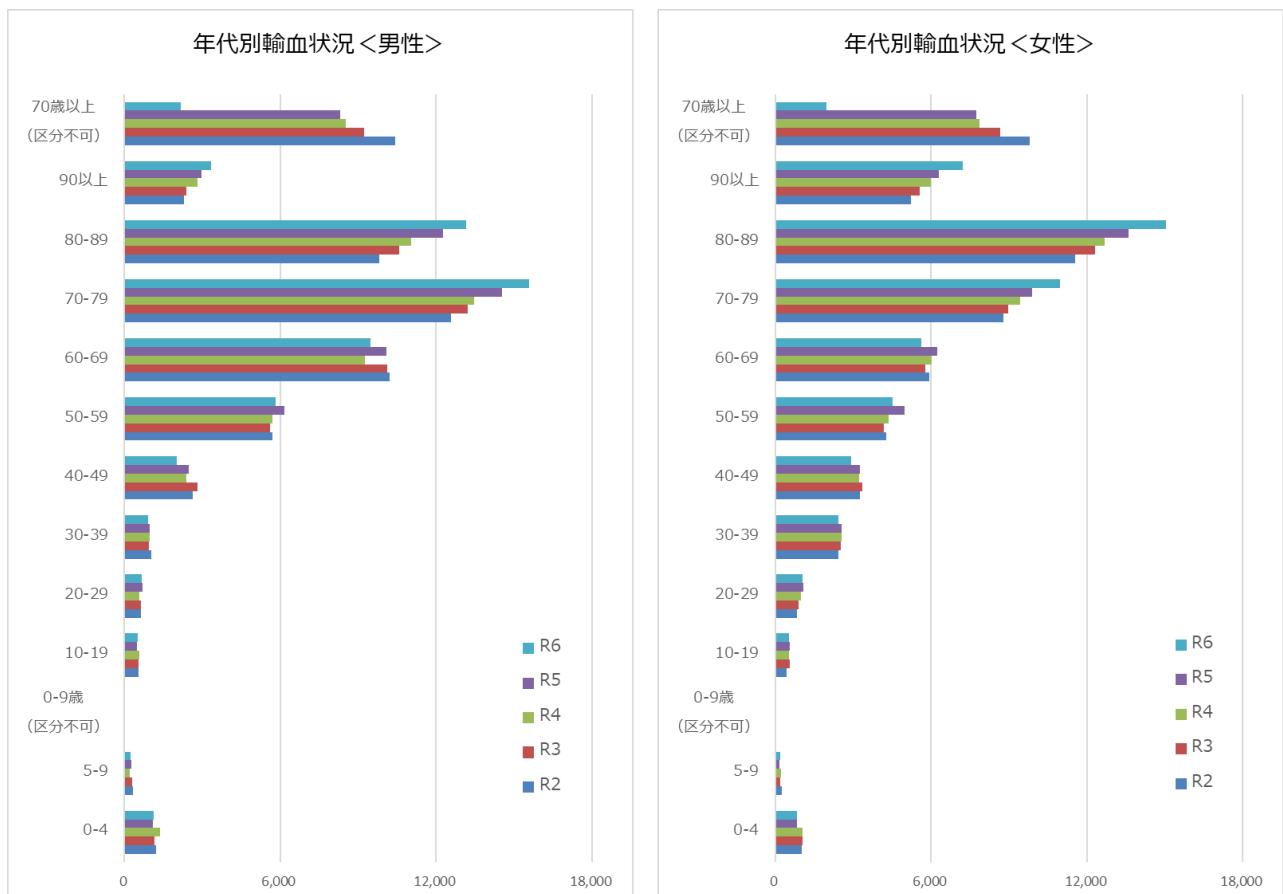
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の 34.9%が使用されており、前年（33.2%）とほぼ同様である。

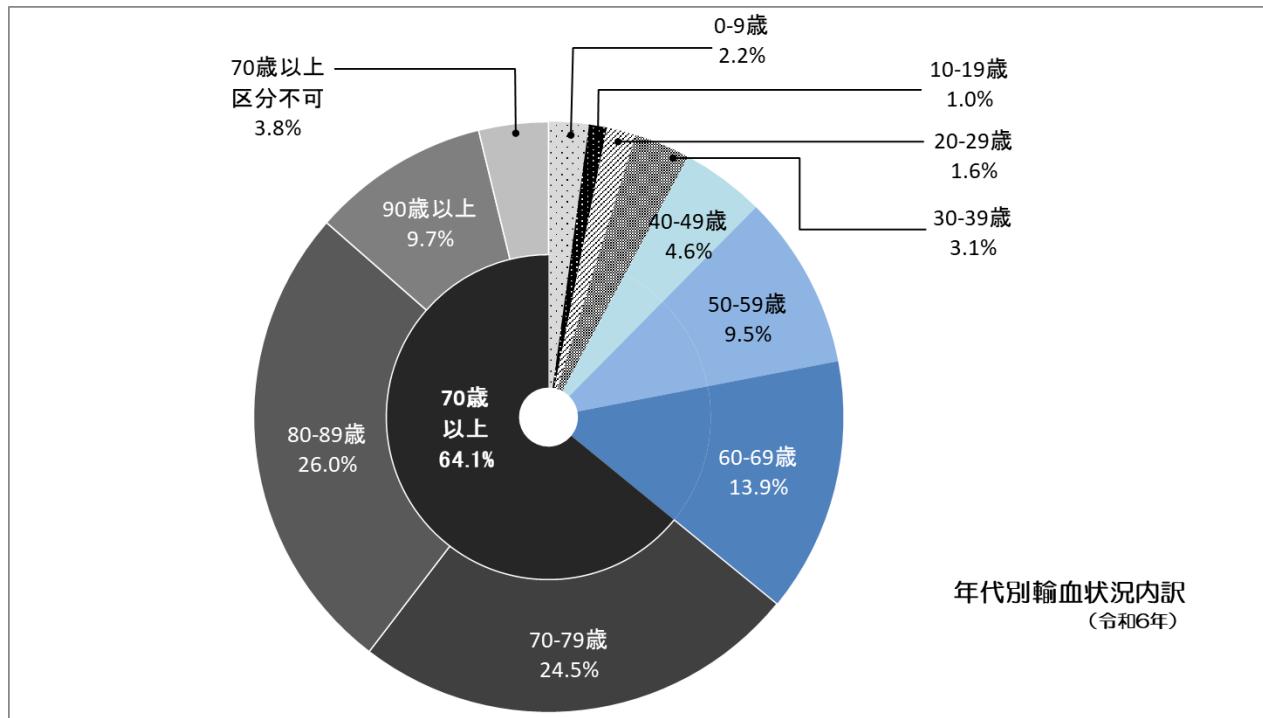
※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも 100 とはならない。



・年代別では、50 歳以上の患者への使用が全体人数の 87.6%、60 歳以上 78.0%、70 歳以上 64.1%で、いずれの区分でも前年（50 歳以上 87.7%、60 歳以上 78.2%、70 歳以上 64.3%）とほぼ同様である。

※同一人について30 日間の複数回使用は1人としてカウント。70 歳以上で 10 歳ごとに区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。

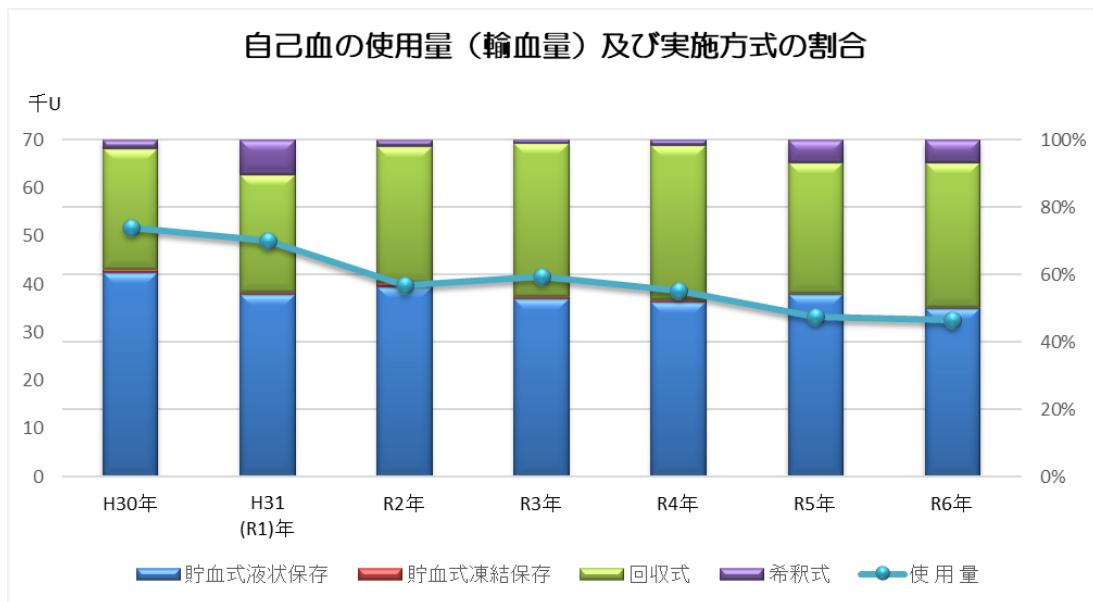




※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

## (8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は32,458.3Uで、前年(33,248.0U)より減少した。

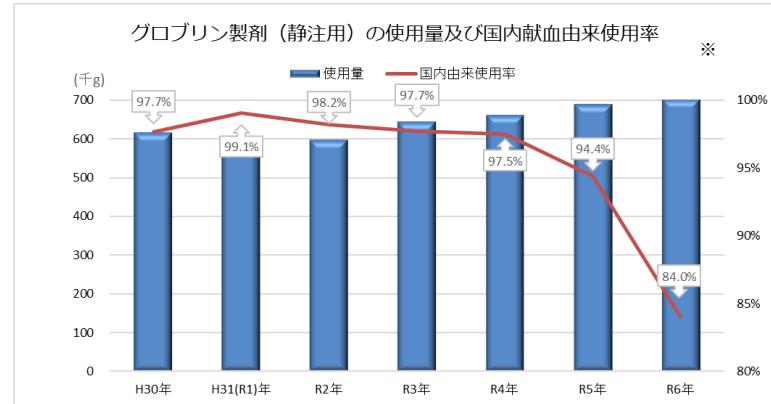


## (9) 血漿分画製剤の使用状況

血漿分画製剤（組織接着剤を含まない。）の使用量は 464,001 本で、前年（483,365 本）より減少した。グロブリン製剤全体（特殊グロブリンを除く。）の使用量における国内献血由来使用率の割合は 75.7%（590,730.0 g）で、前年 86.3%（652,379.5 g）より国内自給率は減少した。

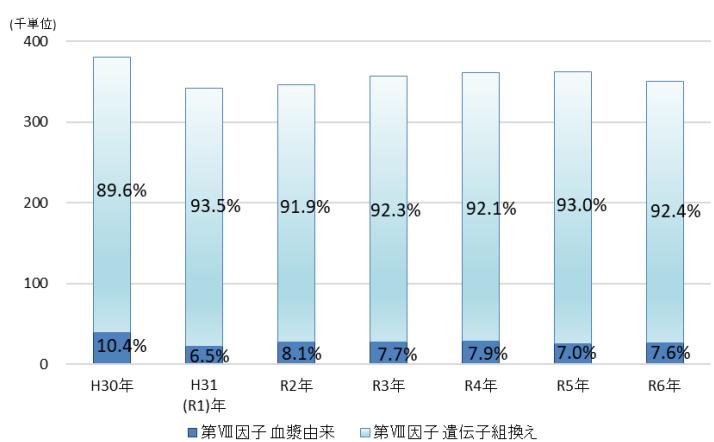
グロブリン製剤（静注用）の使用量における国内献血由来製剤の割合は 84.0%（590,729.5 g）で、前年 94.4%（652,379.0 g）より国内自給率は減少した。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む。）の使用量における国内献血由来製剤の割合は、74.9%（1,970,637.8 g）で、前年 76.0%（2,146,409.3 g）より国内自給率は減少した。

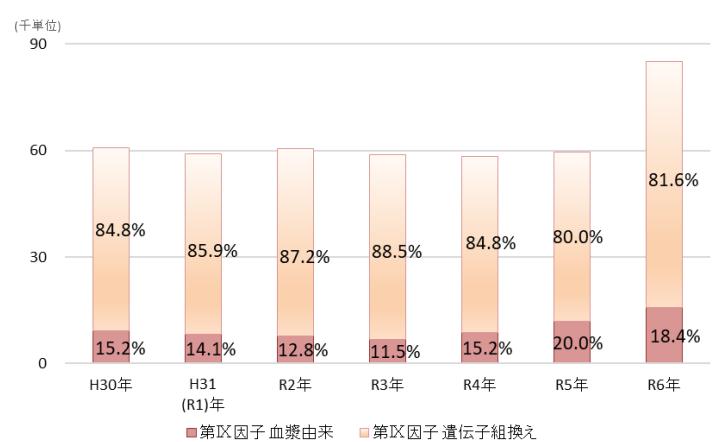


※平成 30 年から「静注用 規格 20 g」（国内外由来あり）を追加、令和元年（平成 31 年）から「皮下注用 規格 1 g・2 g・4 g」（全て国外由来）を追加。  
※令和 5 年から国内献血由来使用率の算出方法を、使用本数による算出から使用量による算出に変更した。

### 第VIII因子製剤の使用量及び 血漿由来・遺伝子組換え使用割合



### 第IX因子製剤の使用量及び 血漿由来・遺伝子組換え使用割合



※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1 単位=250IU